

## 関東にクマソ来襲

9月上旬の鞘翅学会で千葉県館山市の天然記念物大ソテツで、クロマダラソテツシジミが発生中と報告がありました。いち早く情報を察知した千葉蝶類談話会の3人組が9/5日、そのソテツに赴くと個体数は多いもののまだ他地域への拡散は見られず、他の新芽があるソテツでは発見できなかった。との情報があった。

一方、9/8頃東京都品川区大崎、西品川、港区南部でも成虫が確認されNHKのニュースでも矢後勝也氏の解説で放送された。こちらの発生規模はどの程度か詳しくはわからぬが、これから12月初めまで発生が繰り返される筈である。本種の発生サイクルは非常に早く9月～10月頃では約2週間前後で孵化から成虫に至る。11月末頃で20日～1ヶ月くらいかかるようになるが、その間♀はソテツの新芽を求めて長距離の拡散を繰り返すので、今後爆発的な大発生につながる可能性もある。

本種の発生が自然飛来に由来するものか放蝶によるものなのかは定かではないが、昨年名古屋まで発生が確認されており、いつ飛来してもおかしくないと思われていたので自然飛来としておいた方が夢があるかもしれない。今後何処でみつかってもおかしくないので、ソテツの新芽をもつものを見つけたら確認を怠らないよう心がけてください。10月下旬以降の低温期型はかなりカッコ良い一品ですぞ！

## \* 新入会員（宜しく願いいたします）

宮沢輝夫 〒271-0092 松戸市松戸 1743-2 ウインズ・フジ 602号 HT:090-2369-0184

tmiyazawa@khf.biglobe.ne.jp

針谷毅 〒230-0075 横浜市鶴見区上の宮 1-36-1 T:045-573-0172

takehari@cc.netyou.jp

## \* メアド変更

松井弘 matsui48@m7.gyao.ne.jp

## \* 例会、総会兼例会日程

2010 2/16(火) 例会 3/14(日) 13:30～ 総会兼例会

## \* 10月例会写真展について

10月の例会は第2回写真展です。昨年同様梅村さんに担当していただくことになりました。奮ってご参加ください。

## 実施要項

1. 対象作品：虫に関係あるものなら生息地の環境写真、スナップ等今シーズン撮られたもの。
2. 提出方法：梅村 (m.umemura@jcom.home.ne.jp) までメール添付でJpeg形式のファイルで送ってください。枚数は10枚/人、大きさは200kb/枚くらいとしてください。撮影対象の名称、簡単な

説明を加えてくださると助かります。

3. 提出締切：10月15日

4. その他：画像ファイルの返却、補正は致しません。

楽しい、美しい、面白い？写真を多数お待ちしております、宜しくお願いいたします。

\* 新聞紙上より



写真・伊藤裕幸

渡りをするチョウとして知られるアサギマダラ。その羽に印を書いて放し、飛んだ距離や移動経路を調べるマーキング調査が静かなブームとなっている。

をしている版画家の広田日出樹さん（群馬県高崎市）に誘われ、群馬県片品村で開かれた

### 昆虫少年に戻り 列島の長旅記録

■ チョウの渡り調査  
のぶの読免(伊)  
マーキング調査予定  
は、チョウやガの研究  
者らで作る日本鱗翅学  
会 (<http://lepi-jp.org>  
/) などで。



たマーキング調査に参加してみた。

必要な道具は、捕虫網と油性ペン。羽に書いた印や日付などを残しておく調査表は、この日の参加者10人で共通のものを使用した。

アサギマダラは、ふんわり、ふんわりと舞い、捕まえるのは初心者でも難しくない。1時間半ほど動き回っている間、汗だくになって、気分はすっかり夏休みの昆虫少年に戻った。最初は尻込みしていた小学生の女の子が、最後に「10匹を捕った」と誇らしげだったのはほほ笑ましかった。

放したチョウの情報は、インターネットの情報交換サイトなどに登録する。山形県から沖縄・与那国島まで、2000キロ以上移動していた例もあるという。

(宮)

オスの流儀

池田清彦と交尾をする



なほ毛状態で  
ある。オスの  
役目はただひ  
とつ。新女王  
のオスに生まれなくてホント  
よかった。

(生物学者)

女王にささげる「命」

ヒトを含めた哺乳類では、卵子と精子が合体して受精卵にならなければ発生がはじまらない。ところが、ミツバチでは未受精卵もちゃんと成体に成長し、しかもすべてオスになるのだ。オスバチの染色体の数は、メスである女王バチやハタラクチバチの半分しかないわけだ。

春になると、ミツバチの巣の中に、ハタラクチバチに比べて体や眼が少し大きく、何の仕事もしない居候が沢山現れてくる。これがオスバチである。自分でエサをとることもせず、ハタラクチバチに蜜をもらって、完全なヒモ状態である。オスの役目はただひとつ。新女王のオスに生まれなくてホントよかった。

交尾の時期が来ると、オスたちはあちこちの巣の中から飛び立って森の梢の一角に集まり、そこに飛んでくる新女王を待つのだ。たむろしているオスバチはツバメの格好のエサとなり、新女王に逢えずに食われるものも多い。新女王が現れるとオスたちはいっせいに突進し、ほんのわずかのオスだけが大願を遂げる。ただし、交尾をしたオスに待ち受ける運命はまもなくの死である。オスは生殖器自ちもとも新女王に差し出してしまふので、体液が漏れて死んでしまふのだ。ミツバチのオスに生まれなくてホントよかった。



熊田千佳慕さん死去

熊田千佳慕さん  
「ファールブル昆虫画」

昆虫や草花を細密な水彩画で描き、「ファールブル昆虫記」の絵本シリーズで人気を集めた画家、熊田千佳慕(くまだ・ちかほ、本名・五郎(ごろう)さん)さんが13日、誤嚥性肺炎のため横浜市内の自宅で死去した。98歳。後日お別れの会を開く

横濱市生まれ。東京美術学校(現東京芸大)に在学中、写真・デザイン集団「日本工房」に入り、対外宣伝グラフィ誌「NIPPON」のレイアウトを担当。写真家の土門拳とは同僚で、撮

予定。喪主は長男、ふたば氏。

この1〜2年は横になることが多かったが、死去前に東京の百貨店で始まった展覧会に観客が多数訪れたと聞き、喜んでいたという。他の絵本作品に「ライオンのめがね」など。

影上の助言も行った。

戦後は絵本作家となり、少年時に親しんだ「ファールブル昆虫記」の絵本化をライフワークに。60歳で1冊目を出版し、その10年後には伊波羅ニヤ国際絵本原画展に入選した。「私は虫、虫は私」と語り、時には地面に腹ばいになって虫や花を観察。膨大な時間をかけ、正確で生き生きとした細密画を描き、「日本のプチファールブル」と呼ばれた。

蚊を介して感染する寄生  
虫病「フィラリア症」は、  
悪化すると足の皮膚が象皮  
のように膨れあがる。患者  
は歩行が困難になるばかり  
か、好奇の目にもさらされ  
る……。そんな悲惨な人  
生を送らせたくない。世  
界保健機関（WHO）で熱  
帯病対策に取り組む一盛和  
世さん（57）は力を込めて語  
った。

昆虫学者の一盛さんが所  
属しているのは、そう  
したフィラリア症やデ  
ング熱、コレラなど14  
の熱帯病の対策部門。  
衛生や医療環境が発達  
していない途上国で主  
に発生し、先進国の目  
が向きにくい疾病の撲  
滅が目標だ。発生源で飲料  
水の浄化や蚊帳の使用を提  
言するなど、地道な活動が

## 患者10億 撲滅へ飛び回る

09.8.4. 読売(4)

続く。

この分野に進んだきつか  
けは、幼いころ蚊に興味を

持ったことだった。「なぜ  
人の血を吸うんだろう？  
トンボやチョウはなぜ血を



啓発用のパンフレットを広げ、熱帯病撲滅への思いを語る  
一盛和世さん（ジュネーブのWHO本部で）＝金子亨撮影

吸わないんだろう？」。好  
奇心はどんどん膨らみ、大  
学時代は熱帯病を媒介する  
蚊の研究に取り組んだ。国  
際協力機関の一員としてア  
フリカでマラリア対策に当  
たるなどして、1992年  
にWHO入りした。

ジュネーブの本部へ異動  
となった2006年までは  
現場一筋。サモアやバヌア  
ツ、フィジーを拠点に太平  
洋の小さな島国を船で回  
り、熱帯病対策を助言した。  
医薬品の調達や蚊帳の配布  
など、「手伝えることは何  
でもやった」という。

今も忘れられないのは、  
太平洋のキリバスで出会  
ったフィラリア症の男性  
だ。膨れた足を啓発用に撮  
影させてほしいと頼むと、  
こう言ってくれた。「自  
分は妻の助けなしには歩

けない。そんな自分が誰  
かの役に立てるのなら」。  
思い出すたび、奮い立たせ  
られる。

一方で、「呪いのせいで  
病になった」と信じる住民  
に、誰でもかかり得る病気  
だと説明するのも大事な  
仕事だった。7人しかい  
ない島にもいとわず出向い  
た。

撲滅を目指す14の熱帯病  
の感染者は10億人。貧困や  
政情不安で対策は遅れがち  
な上、収益が見込めない医  
薬品の開発に先進国のメー  
カーは消極的だ。それでも  
「世界が動けば必ず撲滅で  
きる」。その信念がエンジ  
ンになっている。

◇ このシリーズはジュネー  
ブ・平本秀樹、ウィーン・  
金子亨が担当しました。